



校内研修で使える!



# 誌上 進路指導ケーススタディ この生徒とどう向き合う?

進路にまつわる生徒のさまざまな悩みに、先生方はどのように対応されているでしょうか？  
ありがちなケースを取り上げ、実際に先生方に回答していただきました。さらに、日頃生徒の悩みと向き合うスクールカウンセラーの方や、長年高校現場で活躍され現在は会津大学で教育学や教育カウンセリング心理学を研究されている荻間澤勇人先生にも、ケース対応の極意を伺いました。校内研修などにも、ぜひお役立てください。

取材・文／清水由佳 イラスト／おおさわゆう

## ケーススタディ 「クラスになじめない様子の生徒の場合」

<場面> Date

4月下旬の面談週間。気になった生徒がいたので呼び出し面談を行った。

教師：最近、少し元気がないね。どうしたの？何か心配ごとがあるのかな？

生徒：ん～、そうですか？元気なさそうですか？

教師：そうだね。少し心配していたんだけど。

生徒：はあ、なんか、クラスの雰囲気になじめないっていうか……。

教師：なじめない感じがあるんだ。その感じ、もう少し教えてくれる？

生徒：みんなそれぞれのグループっていうか、そんなものがあるって入りづらいうって感じで。

教師：なんでだろうね？

生徒：……………。

↓ この後、どのような対応をしますか？(しましたか?)

● どう対応するか

● 最初のひと声をどうかけていくか

私は

こうする！

こうした！

実際に、読者の先生方が  
どうされたか・どうされようとするかを  
お伺いしました。

様子をしっかり見極め、  
再度面談

滋賀県 草津東高校・堀浩司先生



このまま突っ込んで聞いていくと、実は時間をかければそれなりに解決する問題を、かえって「深刻な人間関係」の図式にしてしまう危険性があるので、この面談はいったん打ち切り、近いうちにもう一度面談します。それまでに、掃除の時間など生徒の動きが自由な時間帯に、その生徒の様子をつぶさに観察し、人間関係の微妙な機微を察します。

クラスメイトと一定距離を置いて付き合いたいタイプの生徒もいますし、早くクラスになじみたいと焦る生徒もいます。その生徒が置かれている状況とタイプをしっかりと見極めたうえで対策を講じます。LHRの時間にアイスブレイクやクラスづくりのプログラムを行うことが有効なのか、アクティブラーニングのグループワークのグループ編成に工夫を凝らすべきなのか、あるいは…とにかく、性急に短絡的解決（「○○君、彼に声をかけてやってくれよ」等）を指さないことが肝心だと思います。

授業で「安心・安全の場」  
を徹底

山形県 米沢工業高校定時制・高橋英路先生



実際、担当したクラスでも同様の相談がありました。いずれも進路変更（退学）まで考えていたケースです。

その際、私の観察や本人の話、周囲の生徒の話の話を聞いてみると、周囲から嫌われているということはなく、何となくできたグループに入りそびれてしまい今更…といった感じでした。本人も周囲も「話しかけてくれれば」と言っていましたし、「話す」行為そのものが嫌というわけではなかったようなので、授業形態を抜本的に改善し、対話中心の授業に。ただ、肝心なのはいたずらに話し合いばかり増やしても、そこが「安心・安全の場」でなければ、話せない生徒には苦痛でしかありません。そこで、どんな発言も否定せず「なるほど」といったん受け止めることを徹底しました。

授業外でも、対話の中で助け舟を出したり声かけをしてくれた生徒に、「あの発言はとても良かった」「○○さんはあまり反応できなかったみたいだけど、話しかけてくれて嬉しかったと言っていたよ」などを伝え、

Viewpoint

教育カウンセリング心理学の専門家の視点から、  
ケース対応の極意をアドバイスいただきました。

まずは、教師と生徒の  
1対1の関係づくりから

問題解決を急がず  
クラス全体に働きかける

ガイダンスカウンセラーの木村さん

もおっしゃっていますが、「何でだろうね？」などの問題解決を急ぐような問いかけは、会話の流れを分断してしまっています。生徒の「……」を理解し、「何でだろうと聞かれても、すぐにはわからないよね」と、質問が不適切だったことを認め、「不安なことがあったら、先生聴くから話にきて」と、今後

も援助していく姿勢があることを伝えていくといいでしょう。  
そのうえで、教室全体を「安心・安全の場」にしていく。そのため、LHRの際にグループ活動などを行い、学級全体にさりげなくアプローチをかけていくことをお勧めします。グループアプローチが苦手な先生なら、行事を活かしていてもいいでしょう。

高校1年の最初の時期は特に、広い学区から生徒が集まってきて、最初の友達づくりがどうなるか、生徒みんなが大きな不安と期待を抱いてきて



会津大学 文化研究センター  
上級准教授  
荻間澤 勇人 先生

かりまざわ・はやと ●1986年、岩手大学工学部卒業後、岩手県立公立高校教諭に。早稲田大学大学院教育学研究科後期博士課程単位修得退学。教育学、教育カウンセリング心理学を専門とする。2015年4月より現職。

います。そこで、まずは原因を追究する前に、もっと基本的な人間関係づくりをしていくことが大切です。

また、教育学的見地から言えば、新学期の最初は、教師と生徒の1対1の信頼関係をしっかりとつくるのが先決です。そのため、4月は教師主導でさまざまなグループ活動を実施し、生徒の不安を軽減し、「この先生は、自分のことをしっかりと見てくれている」という安心感につなげていきます。そして2〜3カ月かけてクラス全体の信頼関係につなげていけばいいのです。

とはいえ、「このような問題は時間が解決する」と待ちの姿勢をとる先生も時々いらっしゃいますが、それはダメです。先手を打って、早い段階にクラスづくりをしていけば、後々得られることもたくさんあります。

まずは、先生自身が、どのようなクラスにしていきたいのか、目指すべき

## スクールカウンセラーの視点

このようなケースで、スクールカウンセラーならどう対応されるのか。先生たちとの協力のあり方なども伺いました。



ガイダンスカウンセラー  
木村佳穂さん

2005年、岩手大学大学院教育学研究科修了後、青森県と栃木県で6年ずつスクールカウンセラーとして勤務。2017年3月まで、早稲田大学教育・総合科学学術院で非常勤講師も務める。

### 教科担当の先生とも情報共有し、声かけからスタートを

まずは先生が生徒の様子に気付いて、先手を打って声かけされているところが大事なポイントだと思います。ただ、最後に「なんでだろうね?」と原因追究してしまっていることが多いので、答えづらひは。それよりも、苦しさや気付いているとしっかり示して、関係性を強めていくやりとりが大切です。さらに他の教科の先生たちとも情報共有し、皆さんで意識的に声かけされることをお勧めします。学年最初で、先生と生徒の関係も始まったばかりなので、まずは生徒が「ちゃんと受け止めてもらっている」という安心感を抱ける関係づくりを意識していただけたらいいと思います。

そのため、いきなり「スクールカウンセラーのところへ相談に行ってみたら」と伝えてもらうのではなく、先生を主体とした支援の仕方と一緒に考えていけるといいと思います。

#### One point

最初は教師が主導して、「みんなでゆるくつながる」を目指す!

この連載では読者の先生方のご回答と、実際のお悩み例をとりあげています。HPで募集しますのでどうぞお寄せください。

クラスの全体像を明確にして、そのための学級経営を心掛けていくことが大事だと思います。

**中学校や前学年の先生から情報収集して共有を**

とはいえ、あまり急ぎすぎるとは、最初は「生徒同士がみんなゆるくつながる」という感じにしていくことを目指したいところです。

グループ活動だけでなく、授業の中で、アクティブラーニングなど対話型の授業を取り入れていくのも、一つの方法です。上手に導入されている先生もたくさんいらっしゃいますが、話せる環境がまだできていない状況の中で、無闇に対話の機会をたくさん設けていっても、人間関係づくりにうまくつながらない場合もあります。無理をせず、最初は、小テストの丸付け程度で隣の人と関わったり、簡単なペーパーワークくらいから始めるなど、友だちの話をしっかりと聴くというスキルを定着させることも大切です。なぜなら、聴いてくれる環境が整うことで

安心して話すことができるからです。

八戸北高校の小向先生は、生徒自身に前の学年・中学校でどういう状況だったかを本人に思い出してもらうとおっしゃっていますが、先生自身も情報収集を工夫されるといいと思います。私も、新入生を担当した際には、入学前に生徒全員の中学校を訪問して、生徒の中学での様子や、気をつけるべきことなどを担任の先生に聞きました。パニック傾向の生徒の場合は、どういった状況で、どんな対応を望むかなど、ご家族からの申し入れもあることでしょうか。そのような情報を学年担当全員で共有しておくことも大事です。そうして多くの教師が気にかけて支援することで、自分ではなくても誰かの関わりがヒットすればいいのです。また、他の教師の評価を聞くことは、教師自身、自分の盲点にも気付く重要な機会になります。「自分にはこうは見えていなかったが、こんな視点もあったのだ」と気づきにつながります。ぜひ、教師同士での情報共有を大切にしてください。

生徒同士の関係を手助けするよう心掛けました。

授業は毎日あるものなので、こうした取り組みの積み重ねはかなりの大きな成果があったと考えています。

### 以前の状況を 確認していく

青森県・八戸北高校・小向暢輝先生



なじめていないということは、クラス内に親しい友達がない状況でもあり、おそらく以前にも最初はこういうことがあったと思われま。そこで、中学(高校1年、2年)の時はどうだったか、その時、自分はどうかを尋ねます。以前の経験を思い出してもらうことで、「焦らずにまずは自分から誰

かに話しかけていけばうまくいく」という話でまとめられることも。その後も、ちよくサインを出し続けていくと思います。

### 面談週間は、 全員対象で面談を

滋賀県・滋賀短期大学附属高校 寺田隆信先生



面談週間には、全員対象で面談をします。クラスの感想や悩みごと・不安なこと、友達関係などを聞き、特に友達関係は図式化して、お互い友達意識があるか確認します。これによって、この生徒のことを他の生徒がどのように見ているかを見ます。さらにGW明けのLHRで生徒が交流できる場をもち、緊張をほぐせるよう努めます。